

占領下の「平和」、交錯する視線

——井伏鱒二『花の町』——

滝口明祥

一、「花の町」における「平和」

かつて「大東亜戦争」と呼ばれた戦争において、幾多の作家や批評家が徴用されて南方へと赴いたことはよく知られている。^①その中に井伏鱒二もいた。一九四一年一月に徴用され、翌月に出航、香港沖を航行中に開戦の報を受けた井伏が、占領直後のシンガポールに入ったのは翌年の二月。そこで井伏は宣伝班の一員として「THE SHONAN TIMES」(二号から「THE SYONAN TIMES」という英字新聞の編集責任者を二ヶ月ほど務めている。寺横武夫はその新聞の「創刊号を含む出発当初数日間の、布告を満載した紙面構成」^②)に注目しているが、その布告の中には、華僑を「検証」するために集合を命じるものも含まれていた。そして集合させられた華僑のうち、少しでも「不良」または「敵性」と疑われた者は全て「肅清」されたのである。短期間の間に相当数の華僑を相手に実施されたこの「検証」において、慎重さが顧慮されることなどほとんどなかったようだ。占領後一ヶ月足らずの

間に「肅清」された華僑の数は数千人から数万人にもものぼると言^③う。神保光太郎や中島健蔵など第二次徴員組とは違って、既にシンガポールにいた井伏は「検証」のために集められた華僑の姿を何度も目撃している。^④しかも、井伏は民間人としてその場にいたわけではなく、陸軍の徴員として、宣伝班の一員としていたのである。「昭南」という名前に変えられたシンガポールにおいて、井伏もまた確実に「加害者」の一人であったことは間違いない。

井伏は一九四二年一月には徴用解除となり日本に帰国しているのだが、その直前の八月から一〇月まで「花の街」という作品を「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載し、翌年に『花の町』(文藝春秋社、43・12)として刊行している。井伏は新聞連載が始まる前に掲げられた「作者の言葉」(「東京日日新聞」42・8・13)において、「昭南市はいま非常に平和である。非常によく治まってる。嘘ではないかと思はれるほどに平和である。(これではもつたいないほどの平和ではないか。)」などと書いている。実際、『花の町』は「一見したところ、占領地の「平和」な日常を描いた作品

であるように思われる。

先行研究においては、『花の町』にあからさまな軍国主義的な記述がないことを評価する意見が大勢を占めてきた。たとえば東郷克美は「戦争のもたらす荒廃の影がまったく落ちていない点で稀有の佳作」⁽⁵⁾だとする。だが、『花の町』に描かれているのが単なる「平和」なのであれば、都筑久義のように「占領地の平和と占領民の同化ぶりをこれほどみにこに描写した『花の町』は、軍部当局の期待に最も応えた従軍小説だったのである」⁽⁶⁾と言わざるを得ないだろう。前田貞昭は「シンガポールの『平和』を強調することは、そのまま支配権力の宣伝に役買うことにほかならない」⁽⁷⁾が、「作品そのものから読み取れるのは、『平和』ではなく、日本軍支配に対する鋭い風刺なのである」と述べる。だが、シンガポールにおける井伏の立場を考えた場合、自身を第三者の如くにして日本軍を「風刺」するというのは単なる無責任でしかないのではないか。

近年では直接的な「風刺」というよりも、より根底的な批評性を『花の町』に見出す試みがなされてきている。たとえば宮崎靖士は「占領地という非均等な力関係にある発話の場から、話者とは異なる「コード」や「コンテクスト」の存在やその関与を掘り起こそうとする」⁽⁸⁾性質に、また塩野加織は「言語の規範が揺れ、変質し、更新され続けるその動態」が描かれていることに注目している。本稿においてもそれら先行研究を参照しつつ『花の町』の批評性について検討していくことになるが、その際には権力関係をあまり固定化して考えないことが重要になるだろう。だが、

だからと言って、占領地における非対称的な権力関係を軽視してよいということでは決してない。むしろ逆である。そしてそれは、『花の町』における「平和」の内実を探る試みともなるはずだ。

また、『花の町』は初刊本以降かなり長い期間にわたって刊行されず、どの選集類にも収録されなかったのだが、『井伏鱒二全集』（筑摩書房、64、65、以下「旧全集」と表記）において戦後初めて収録された。その際、少なくとも数の改稿が行われており、それについても本稿は適宜参照していくこととしたい。もちろん後年に行われた改稿によって生じる意味を避及的に初刊本にあてはめることには慎重であるべきだが、この改稿は作品の性質を変えるというよりは、むしろ作品がもともと持っていた性質を強調するようなものだと考えられる⁽⁹⁾。この点に関しては次節以降の議論によって明らかとなるだろう。

二、同一性という仮構

「日本語の南方進出につれて起つた国語改良問題が、紛糾したのは昨年（一九四二年）の夏ごろだったと思ふが、ちやうどその頃、井伏鱒二氏の『花の街』が新聞に連載された。機を同じうして、作中、原住民の日本語の仮名書きに対するまぢまぢな様子が描かれてゐて、私は興味深く読みだした記憶がある」と、野村尚吾『花の街』について（『早稲田文学』43・5）は述べている。ここで言われる「国語改良問題」とは、一九四二年に国語審議会から出された「標準漢字表」や「新字音仮名遣表」によって巻き起こされた議論を指す。もちろんそのような漢字制限や表音式仮名遣という国語簡

易化論はそれまでも繰り返し起こってきたものではあるが、この時期の議論は「大東亜共栄圏」における日本語教育という実際上の問題を伴っていたことで大きな影響力を持つこととなったのである。¹¹⁾

だが結局、「国体」や伝統を重視する人々の激しい抵抗にあって、国語審議会の案は実施には至らなかった。もちろん一方で、日本語を「大東亜共栄圏」に普及させるためには国語の簡易化が必要とする意見はその後も根強く燃り続けたのだ。両者の議論は平行線を辿り、容易に一致点を見出せる状態にはなかったのだが、その間にも日本の占領政策は実際に行われていたのであり、その重要な一つとして日本語教育もあつたのである。

井伏がいたシンガポールでは、中島健蔵を中心として「日本語普及運動」が展開され、神保光太郎が園長を務める昭南日本学園では現地の人々に対して日本語教育が行われた。神保光太郎『昭南日本学園』（愛之事業社、43・8）には中島が書いた「日本語普及運動宣言」（陣中新聞）42・4・29）が引用されている。一節を抜き出してみよう。

正しく強く美しき日本語を馬來及びスマトラ島に充滿せしめよ。之も大切な御奉公の一つである。存住の諸民族をして日本語の下に共同一致せしめよ。勿論我等は、彼等固有の風俗習慣を尊重し、新しき国民として皇軍の保護下にある彼等の幸福を目覚めせしめなければならぬ。そのためには益々日

本語を与へて風俗習慣の差を消して行かなければならぬ。「彼等の幸福」を与えるのは「我等」であるとすると認識の傲慢

さは否めないが、もちろん中島や神保にそのような自覚は少しもなかっただろう。前田貞昭が的確に指摘しているように、彼らには「民族的優越意識が底流しているにしても、文化的優越者と文化的劣等者という別の枠組みが用意される」のであり、「教育されるべき対象を見出したかれらにおいては、支配者の立場は（純粹）に教育者の立場に擦り替えられる」のだから。彼らに共通して見受けられるのが、「南方文化」が植民地化によって固有性を失ったという点に、日本または日本語の優位性の根拠を求める傾向である。もちろん彼らにとつては、「日本」或いは「日本語」の固有性は疑うべくもない前提となつてゐる。神保は前掲『昭南日本学園』において「単に語学を教授するのではなくして、日本語を通じて、日本を教へたかつた」と言う。日本語教育は「日本語精神」を教えるためのものだと言つたのだ。

井伏は中島や神保と親しく、「THE SYONAN TIMES」の編集責任者を二ヶ月ほどやめた後は昭南日本学園で現地の教員を相手に日本史を講義するなどしていたようだ。『花の町』には、昭南日本学園の園長である神田幸太郎という人物が登場するが、それは明らかに神保がモデルであり、日本の大学でフランス文学を講義していたという築地弁二郎は中島、主人公の木山喜代三は井伏自身であるだろう。もつとも、作品の序盤において木山の名が出てくることはない。彼はあくまで（マルセンの旦那）として描写されるのだ。作品の後半に行くに従つて語りは木山に内的焦点化を行うことが多くなり、語り手と木山がほとんど「癒着」（宮崎掲掲論文）しているかのような印象を与えるのだが、（マルセン

の旦那」という現地の人々が宣伝班の班員を呼ぶ際の呼称でもって木山が描写されるこの冒頭場面を等閑視することは出来ないだろう。作品はその冒頭を木山たち（マルセンの旦那）の占領地における位置を予め読者に告げることから始めているのである。

そして木山はペンキ屋と骨董屋の主人との喧嘩に介入するが、彼らのコミュニケーションは円滑に行われず、さまざまなズレを見せている。木山が（それは、いかにも可憐に見える草ではないか。私はこのマライに来て以来、随処にこの草を見た。我々日本人はこれをお辞儀草といつてゐる）と言えば、骨董屋の主人は（左様、これは随処にはびこる雑草である。マライ人どもは迷信から、この草を媚薬として用ひるといふことである）と言つて、その草を無造作に抜き取るのである。木山にとつての（お辞儀草）は、マレー人（「マライ人」「馬來人」）にとつては（媚薬）なのであり、骨董屋にとつては（雑草）ではない。「花の町」においては、こうしたズレがさまざまに描かれ、ユーモラスな雰囲気を作っている。しかしそのようなズレを（マルセンの旦那）と現地の人々との間のみあるものとして考えては『花の町』の批評性を取り逃がしてしまふに違ひない。この作品において、ズレは（マルセンの旦那）同士の間でも起きていたのである。それは例えば、木山と神田の会話に顕著に表れている。（昭南日本学園の園長神田幸太郎とシツカロールと綽名されてゐる木山喜代三と、この二人のマルセンの旦那は大変に上機嫌であつた）と語り手は言うが、その理由は別々なのだ。神田が（彼の教へ子であるベン・リヨンが、仮名遣ひについてわざわざ彼のところへ問合せに來たか

ら嬉しかつた）の対して、木山は（何だか相当の掘り出し物がありさうな骨董屋をこの街に発見して嬉しい）のである。そのようなズレは繰り返し描写される。

木山喜代三は相乗りの相手がこんなに機嫌よくしてゐるので、つい彼の気分も浮いてゐた。しかし木山は仮名遣ひのこなど今は問題でなく、さつき見た骨董屋で掘り出しものをする快適な場面を想像し、気もそぞろといふところであつた。（…）

ところが神田幸太郎は、無益な骨董品の噂など聞きたくない。彼はいま現地に正しい日本語と仮名文字を普及させたといとばかり考へてゐる。

同じ車に乗っている木山と神田は、（たがひに得手勝手で、ちぐはぐ）な会話を延々と続ける。同じ（マルセンの旦那）であっても共通の「コード」や「コンテクスト」を持つてゐるわけではないのだ。つまり、差異は共同体と共同体との間にだけあるのではない。それは共同体の内部にもあるのである。

『花の町』においては、そうした差異がさまざまに顕在化している。たとえば、神田が（えらく大きな声）で喋るのは、そうしないと（彼の匿さうとする山形弁が益々はつきり顕れる惧れがある）からなのだ。或いは、築地が英語の講演を練習しているのを聞いて木山は（弁二郎の発音は幾らか尻上りで、あれはフランス語風ぢやないのかね）と感想を述べる。日本語や英語という同一性の内部に差異が見出されるのだ。もちろん、そうした差異を民族や人種に対応させようとする人物もいるだろう。たとえば花園

洋三は（印度人ならRの発音を強く響かせるので、かげできいてゐても直ぐ印度人だとわかりますからね。ユーラシアンにはまるで英人そっくりなのがゐて、えげつなくて、断じて許せんです）と述べる。ユーラシアン（欧亜混血人）がこれほど嫌悪されるのは、それが同一性を攪乱させるものだからだろうが、この場面の前に、骨董屋の主人の（特徴は喋る英語にRの発音が強く響くことで、この現地支那人としては珍らしい）という説明があるのは花園にとって実に皮肉なことだ。しかも、花園は築地の講演を聞いて（現地人の生意気なユーラシアン）によるものだと間違ひさせようとする試みは予め頓挫させられていると言えらるだろう。

青木美保は「多言語社会（…）」に投げ込まれ、そこで自国語をひろめようとして、ふりまわされているのは、どうやら日本人の方であることがわかつてくる」と述べているが、実際、彼らは現地の人々と話をする際には英語を使わざるを得ないのだ。（現地人がマルセンの旦那たちと対話する場合には、ゆつくりと発音するのが大事である）とされるのは、英語運用能力において現地の人々よりも（マルセンの旦那たち）のほうが劣位に置かれているからに他ならない。また、この作品ではビジン化した言語が頻出するが、それを使うのは現地の人々のみに限るわけではない。日本人が使う言葉の中にも否応なく現地の言葉や英語が混入してくる。（馬来語で散歩といふ意味）の（ジャランジャラン）という言葉は、（この日本の兵隊やマルセンの旦那たちの間でも（…）常用の言葉になつて）おり、（キヤンか？）や（ノー・キヤンか？）

という言葉も（兵隊さんのよく使ふ）ものであると言う。現地の食堂に入れば、彼らは現地の女給たちと漢字で筆談を行うことになる。塩野前掲論文が言うように「言語の習熟度と使用場面によって人物間の力関係は変動し、人物像さえも伸縮する」のである。

つまり「花の町」を読むとは、「日本」や「日本語」というものの同一性をそのものが疑わしくなつてくるような経験なのだ。とは言え、それを認めたくえで考えるべきなのは、にも関わらず占領地における権力関係の非対称性自体は厳然と存在する、という事態なのではないだろうか。現地の人々は相変わらず（マルセンの旦那）の顔色を窺い、或いはその権威を利用しようとする。同一性を攪乱する差異が描かれれば描かれるほど、現に存在している権力関係の不条理さが際立つてくる。仮構でしかない同一性が、あるかの如くに権威を持ち、実際に力を及ぼしているのだから。そこでの権力関係は決して安定したものではありません。しかし、だからこそそれを維持するためにさまざまな無理が要請される。その顕著な例が日本軍による華僑の「肅清」だっただろう。そしてそうした無理は、現地の人々だけではなく（マルセンの旦那）にも影響を及ぼしていかざるをえないのである。

三、「平和」の裏にあるもの

『花の町』というタイトルは、この町が「平和」だという「作者の言葉」と対応しているように思われる。花は、「平和」のメタファーとして実に相応しいものであるに違いない。だが、この

作品において、花が印象的に登場しているのは僅か一ヶ所でしかない。ブンガ・チャバカというその花は（地面にうがたれた穴）の中で強烈な匂いを放っている。木山が（この穴は、何であるか。おそらくは、子供たちの砂遊びする場所であらう）と尋ねると、華僑の寡婦であるアチャンは（この地面の穴は、砲弾の跡でございます。日本軍が二月十四日に、プキテマからカセイ・ビルを撃ちました）と答える。花の甘い匂いには、戦争の傷跡が隠されているのだ。この場面に限らず、この作品は慎重に「平和」の裏にあるものの存在を示唆しているように思われる。

『花の町』に華僑の「粛清」を直接描いた場面はない。むしろ、そのような場面を当時の検閲下において描くことは不可能だっただろう。だがこの作品は、決してその事件を無かったことにしているわけではない。たとえば日本人の軍曹は、木山とラツフルスの銅像について話しているうちに（ラツフルスは、百年前に初めてこの島に上陸するとき、この土着の人類を皆殺しにした。もし僕が史実を実際よく知つてゐたら、さういふ発表をでき得るかもしれないですがね。しかし僕は、ちつとも史実を知らないです）と些か唐突に述べる。しかし、日本軍が華僑に対して行ったことを考慮に入れて読むならば、この発言は少しも唐突なものではなくなるはずだ。過去の（皆殺し）の事実が分かれば、自身の罪悪感を幾らか軽くするのに役立つかもしれない。そもそも「粛清」を無視したいのであれば、華僑の寡婦一家を中心に描く必要などどこにもないのであり、『花の町』においては実際には描かれていない華僑の「粛清」が強い影を落としているのである。

華僑の寡婦一家の長男であるベン・リヨンの言動は（教室で先生から大きな声で教はつた通り）のものだ。だが、だからこそそれは不自然なものに感じられる。ベンは（我々は日本精神を知る一つの方便として、まづその手始めに正しい日本文字を書き得るやうに努力するものである）と言う。同じようなことを後の場面でマレー人のウセン・ベン・ハッサンも口にする。（日本精神を覚えるには、日本語を知らなければいけないです。私、もう日本語を自由に話せるですから、私もう日本精神をよく覚え込んでやるです）。それに対して木山は、（君、無茶をいつてはいけない）と答えているが、ウセンが言ったことは（マルセンの旦那）たちが推し進める日本語普及運動の方針に沿つたものであり、そうである以上、（無茶）なのはその運動自体であるはずだ。しかも、ウセンは（当時駐屯の日本将校または軍政部高官のいでたち）をしていると言う。ベンもウセンも、日本の占領政策の反響としてその言動があるのであり、その意味で彼らは占領地における日本人の在り様を映し出す鏡となつているとも言える。むしろ、ベンとウセンとはその意味合いは大きく異なるだろう。前者が劣位に置かれた状態において日々を生き抜くために日本の占領政策に必死に適応しようとしているのに対し、後者は自身より劣位に置かれた者につけ入るためにそれを利用しようとするのだ。だが、前者の痛々しさも後者の醜悪さも日本の占領政策が招いたものであるという点においては変わりがない。

ウセンはベンの妹のトミー・リヨンに恋慕し、彼女との結婚を迫るために何かとベンの家族に言いがかりをつけてきていたの

だ。ペンと隣家の骨董屋の主人はウセンの横暴について、わざわざ木山のいる前でいかにも密談のように話をする。

老人は静かに紅茶をすすりながら、不図、ことさら秘密さうにベン・リヨンにいった。「……」いかにも内証ごとのやうにベン・リヨンも声を落してゐた。しかし彼等支那人は、日ごろ普通の話をするときには、お互に支那語で会話する筈である。第三者の木山喜代三がある前で、しかも秘密のことを特に第三者にわかりやすく英語で話し合ふ。

木山もすぐに気付く通り、これは〈お芝居の密談〉なのだ。つまり、ペンは〈マルセンの旦那〉である木山に間接的に助けを求めようとしているのである。なぜこんなまわりくどいやり方をしているかと言えば、彼らにとつて〈マルセンの旦那〉がどういう反応をするかが何より気がかりだつたからだろう。ペンも骨董屋の主人も、木山の返答に対する反応は過敏と言えるやうなものだ。木山は〈まんまとお芝居に乗せられたと知りながらも〉、ウセンについて彼らに質問していく。木山の言葉にペンは〈動揺の気配〉を見せたり、〈心の平静を失〉つたりする。また、木山と語る骨董屋の主人の顔には〈鼻のさきから顎のあたりにかけ、小さな汗のたまが浮いて〉いる。語り手は〈彼等は、彼等を庇護してくれるものに餓ゑきつてゐるのにちがひない〉と述べるが、端的に言つて、ペンの家族がウセンにそれほどまでに苦しめられてゐるのは、占領地において華僑が置かれてゐる社会的位置のためには他ならない。「不良」或いは「敵性」と見なされただけで簡単に殺されるという状況を当時の華僑が経験していたということを

無視すれば、ペンの日本語に対する熱情も、彼らの異常なほどに思える不安や脅えも何もかもが理解できなくなつてしまつてしまうだろう。

だが木山は、彼らの窮状に対して一定の理解を示しながらも、なかなか慎重な姿勢を崩そうとはしない。〈仮りに若しウセン・ベン・ハツサンがどんなに度し難い人間であるにしても、私は彼を膺懲する資格を持たないのである〉と木山は言うのだ。それに対して骨董屋の主人は〈いや断じて、貴官のその懷疑は不要である〉と言ひ、〈ウセン・ベン・ハツサンのある前でベン・リヨン一家のものが、貴官に対して親睦あるやうに振舞ふことを許して頂きたい。その場合、貴官にはただ、にこにこ笑つてゐて頂けば十分なのである〉と述べる。何故なら木山は〈マルセンの旦那〉だからだ。木山自身がいかにも否定しようと、現地の人々にとつて木山が権力の側にいることは自明の事実でしかない。木山自身の自己イメージと、現地の人々が木山に対して抱くイメージとのズレに、木山もまた翻弄されていく。

四、視線の交錯

木山が訪れたベン・リヨンの家の壁には、日の丸や軍政部からもらった安居証、それからペンの昭南日本学園の修了証書などが掲げられてゐる。その奥の部屋は次のように描写される。〈この円拱のカーテンがときどき風に吹きながされ、カーテンのかけに掛けてある人物写真がそのたびごと目に見える。半紙四倍大の大きな写真版である。これは日本軍がここに入城した直後、誰か支

那人の印刷屋が売りひろめた汪兆銘氏の肖像である。この後に、旧全集においては（見えるでもなく見えないでもないといったやうな、中途半端な場所に掛けてある。意味深長に置く場所を選んではゐる。）という一文が付け加わっている。華僑の家族たちは、誰の写真を掲げるか、ということや、写真を掲げる場所について、いちいち思ひ悩み、気をつかいながら生きていかざるを得なかつたのである。⁽¹⁸⁾

『花の町』は三人称で語られながらも、現地の人々の心中が語られることは決してない。彼らは常に外部から記述されるのみなのだ。むしろ、そのような特徴は『花の町』のみに見られるというわけではなく、むしろ三人称で書かれた井伏作品全般に多かれ少なかれ見られるものだ。⁽¹⁹⁾だが、占領地を舞台としたこの作品においてはそれに独特な意味合いが付け加わっている。たとえば、次の場面を見てみよう。

ペンキ屋は階段に腰をかけ、マルセンの旦那をじつとながめてゐた。それはこの支那人の意地悪さうな眼つきにも見え、不安のためびくびくしてゐるやうな眼つきにも見えた。こちらの思ひかた次第、何とでも解釈されさうな眼つきである。

ここで木山は、ペンキ屋と互いに互いを眺めあつてゐる。木山はペンキ屋の顔に（意地悪さうな眼つき）や（びくびくしてゐるやうな眼つき）を見出すが、どちらとも決められないのだ。この作品においては、現地の人々の心中は常に描かれず、それは必然的に彼らの「真意」についての疑念を読者に起こさせるだろう。

それは木山に助けを求める人々にしても同様である。木山が骨董屋を再訪した際、店の主人は（不愛想な顔で木山を見て、それから急に思ひ出したやうに愛想よくいつた）と言う。急に愛想がよくなったのは（マルセンの旦那）である木山の権威を利用してウセンをベンの家族から追い払おうと考えていたからであり、実際のところ骨董屋の主人が木山のことをどう考えているかは少しも分らないのだ。或いは、ベンの母親のアチャンもウセンの横暴について木山に訴えるが、語り手はそれについて（すこし疑つてみれば、彼女は木山に尚ほこの上ウセンを毛嫌ひさせようとして、こまかく気をつかひながら物をいつてゐるやうにも思はれた）と述べている。

彼らは決して日本の占領政策を批判したりせず、むしろそれに協力しようとする態度を示しさえする。だが、そのような態度が果たして彼らの「真意」を表しているかどうかは作品内においては常に保留のままに置かれているのだ。長らく男性読者に高く評価されてきたらしいアチャンの（純情）⁽²⁰⁾が示される末尾の場面も、その例外ではない。そこでアチャンは日本人の軍曹に会いたいと願ひ、しかし木山はもはや彼を探すことは不可能であると彼女を論ず。そこで彼女は言う。

「おお、それは、私が支那人であるためでございます。」
そして不意に、彼女の目に涙が込み上げて来た。彼女は顔を伏せたので、涙の点滴が、売り物の鏡台の上の同じく売り物の仏具皿の上に落ちた。

しばらく沈黙がつづいてから、木山はいつた。

「吾人は知つてゐる。彼女の純情は、すでに彼の心に徹してゐる筈である。憂か無憂か、しかしただそれだけのものではないといふよりはかはない。」

すると顔をあげた彼女の目に、またもや涙が込み上げて来て頬につたはつた。

木山はポケットのなかの観音堂のおみくじを、無意識に指さきで爪さぐつてゐた。店のあるじは一向に帰つて来る様子もないのである。

このようにして『花の町』という作品は終わるわけだが、ここで示される〈純情〉に感動する前に、この直前の会話において彼女が木山に〈過日以来、馬来人ウセンは多大の饒舌をもつて、私の心をあの日本軍人に誘ひ寄せるやうに仕向けて行きました〉と語つてゐることに氣をつけてみるべきではないだろうか。そもそもアチャンが日本人の軍曹に会つた際、二人は木山の通訳を介して会話をしたのだが、そこで決定的な誤解が生まれていたことは見逃せない。ウセンが自分を騙していたことを知つて、軍曹は〈今度あのべてん師を見つけたら、追及してこの婦人に詫びさせなくてはならぬ〉と怒る。それを木山はアチャンに対して通訳する際に〈いくらから自分の主観を加へ、次のやうに尾鰭つけて説明した〉。即ち、〈ウセンは、この下士官の手によつて厳しく糾問される立場にある。それは時と場所を選ばない〉と述べたのである。そのためアチャンは軍曹がウセンを〈糾問〉するのが確実なことだと思ひ、〈それが真実なら私の家族一同は、不快と煩はしさを同時に避け得ることでございませう〉と感謝したのである。だ

が、その後ウセンは〈糾問〉に遭つた様子もなく、相変わらずアチャンの家にしつこく押しかけていると言ふのだ。この華僑の寡婦が軍曹に会いたいと願うのにはそのような背景があるのであり、それを〈純情〉と取るのは単純に過ぎるだろう。⁽²⁾ 木山はアチャンに〈吾人は悪意をもつて通訳した覚えは更でない〉と言ふが、この場合、木山の中途半端な善意によつてアチャンの誤解は生まれているのであり、木山の責任は避けえないのではないか。

ちなみに右に掲げた文章中、〈しばらく〔…〕つたはつた。〉の部分は旧全集においては削除され、代わりに〈しかし、ここは戦地である。〉という心内語が挿入されている。アチャンの問いかけに木山は何も答えることが出来ないままなのであり、木山の受動性がより強調されていると言える。華僑の寡婦一家に頼られる木山は、中途半端な善意を見せるわりには終始積極的に動こうとはせず、ほとんど迷惑そうな素振を見せることさえある。木山からしてみれば、自分には現地の人々の窮状を救えるような〈資格〉はないということなのだろう。実際、木山は骨董屋を再訪した際に、日本語がわからないはずの主人に向かつて〈ちよつと僕、このベン・リヨンの家に見舞ひに行つて来ます〉と言つているが、それは〈日本の下士官が見てゐる手前、わざと日本語でいつたわけである〉とされている。それに続く箇所は、初刊本では〈商店以外の民家に立ち寄るのは何か照れくさい〉とあり、旧全集では〈徴員や兵隊が商店以外の民家に立寄ることは、不文律だが半ば禁止されてゐる〉とある。木山もまた、その言動を〈日本の下士官〉の視線を意識せずには行いえなかつた存在であることが示さ

れているのだ。木山にとっては、自身もまた権力に従うしかない無力な者だという思いが強かったのだろう。だが、現地の人々からすれば、木山は紛れもなく〈マルセンの旦那〉なのであり、権力の側にいる人間なのだ。その二つのイメージの間で木山は引き裂かれ、永遠に押し黙っているより他はない。

五、「平和」を維持するもの

神保は前掲『昭南日本学園』の「あとがき」において、中島の「日本語運動宣言」や、私の訓示その他に、マライ原住民を「新しき民」「赤子」又は「新しき日本人」と称んでゐるところが多いが、或る意味では、かう称ぶには時期尚早かとも思ふが、宣撫工作の上、又教育指導の上、彼らをかう称ぶことを最も妥当とした私達の信念に拠つたのであることを諒とされたい」と述べている。神保自身の意図がどうであれ、ここに見られる二枚舌は批判されても仕方がないものだろう。外地では現地の人々を「日本人」として教育しておきながら、内地では彼らを「日本人」と呼ぶのは「時期尚早」であると述べているのだから。

ここには先述した国語国字問題の時と同じ分裂が反映している。一方には「大東亜共栄」の名の下にアジアの人々をも「日本人」に含めようとする動きがあり、他方には「国体」や伝統の名の下に「日本人」を血統によるものに限ろうとする動きがある。どちらも「日本」を信じている点においては変わりがないのだが、だからこそ両者の溝は容易に埋まらない。²²その両者の間で、神保も苦慮したということだろう。種々の同時代資料を読みながら見

えてくるのは、日本には一貫した政策など何もなかったという単純な事実である。中島は神保との対談「マライの日本語」（日本語 43・5）において「やはり何等かの指令を出される場合には一本建に願ひたい。これは実に弱つたのですな。東京から来る指令は実にまち／＼なのです」と苦言を呈している。各部署から来る「まち／＼」な指令に振り回される現場の苦勞は察するに余りあるが、だからと言って彼らの言動が免責されるわけではない。

『花の町』において、ベン・リオンは木山に骨董屋の主人が（トナリグミ）をつくりたいと言っていると伝える。そして「私たちのトナリグミは、支那人や印度人や馬來人といつしよにするのであります」と言うのだが、それは生活に窮した者たちのための互助組合のようなものらしい。そのため骨董屋の主人の相談に乗ってほしいとベンは木山に頼む。彼の訴えは切実なものだが、木山には積極的に動こうとする気はないようだ。何故なら、〈役所では、まだそれに関する指令を出してゐない〉からである。「大東亜共栄」という理想は理想のまま、実態はそれとは全く違うことが平気で行われる。そのような状況下で、単なる徴員が勝手に動くわけにはいかないという判断が木山にはあつたのだろう。もちろん、そのような判断が間違っているわけではない。勝手に動いた場合、木山が罰せられる可能性はおおいに考えられる。ただ、木山の保身の結果、現地の人々の窮状が放っておかれるだけのことである。そして、木山の態度は実際にシンガポールにいた（マルセンの旦那）たちの態度とそう異なつたものではなかったのではないか。

『花の町』が戦後かなり長い間にわたって再刊されなかった理由は神保や中島に対する遠慮ということが考えられるにせよ不明と言う他ないが、その初刊本が決して日本の占領政策に合致するようなものでなかったことはこれまで述べてきたことよって明らかだろう。「日本」や「日本語」の同一性そのものに対する疑いを起させながら、それが実際に持っている威力をも描くこと。現地の人々の言動を描きながら、その裏にあるらしい「真意」をも示唆すること。一見「平和」な日々を描きながら、それに隠された戦争の傷跡や現地の人々の窮状をも示すこと。『花の町』に、「加害者」による最も良質な表現を見出すことは、おそらく不当ではない。この作品の批評性は、作者井伏の加害者性をも決して取り逃がしてはいないはずである。

- 注(1) 桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争 P.K部隊が行く』(青木書店、93・7)、神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』(世界思想社、96・3)などを参照。
- (2) 林博史『シンガポール華僑粛清——日本軍はシンガポールで何をしたのか』(高文研、07・6)などを参照。
- (3) 寺横武夫「井伏鱒二」『THE SYONAN TIMES』(「滋賀大国民」)35号、97・6。
- (4) 井伏鱒二「徴用中のこと」(「海」77・9・80・1)などを参照。
- (5) 東郷克美「戦争下の井伏鱒二——流離と抵抗」(「国文学ノート」12号、74・3)。
- (6) 都筑久義「花の町」(「解釈と鑑賞」85・4)。
- (7) 前田貞昭「井伏鱒二・その戦時下抵抗のかたち——『花の町』を軸にして」(「近代文学試論」20号、83・6)。

- (8) 宮崎靖士「井伏鱒二『花の街』における占領地の表象をめぐる——1930～40年代の言語使用に関わる非均等的な力関係と、その表象をめぐる諸相」(「日本近代文学会北海道支部会報」9号、06・5)。
- (9) 塩野加織「問われ続ける『日常』の地平——井伏鱒二『花の町』論」(「日本文学」59巻9号、10・9)。
- (10) もろろ初出から初刊本においても改稿は行われているが、内容に関わるようなものはない。また、本稿では初刊本から旧全集への改稿の全てに触れることは紙幅の関係上不可能であり、特に内容に関わるようなもののみを取り上げることとする。
- (11) 戦時下の日本語教育および国語国字問題に関しては、川村湊『海を渡った日本語 植民地の「国語」の時間』(青土社、94・12)、イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』(岩波書店、96・12)、多仁安代『大東亜共栄圏と日本語』(勁草書房、00・4)、安田敏朗『国語審議会』(講談社現代新書、07・11)などを参照。
- (12) 前田貞昭「井伏鱒二の占領体験——異民族支配と文学」(シンガポールの場合)、『岐阜大学国語国文学』18号、87・3。
- (13) 楠井清文「マラヤにおける日本語教育——軍政下シンガポールの神保光太郎と井伏鱒二」(神谷忠孝・木村一信編『「外地」日本語文学論』世界思想社、07・3)。
- (14) 青木美保「井伏鱒二における社会批評の視点について——作品『花の町』を軸にして」(「比治山女子短期大学紀要」22号、88・3)。
- (15) 野寄勉「井伏鱒二『花の町』論——軍政下の遠慮と屈託」(「芸術至上主義文芸」21号、95・12)は「ラッフルスに限らず、この地に虐殺という行為があったことの暗示とそれに対する目下の態度のとりようがうかがわれる」と指摘している。
- (16) 川本彰「太平洋戦争と文学者——軍政下における火野葦平・井伏鱒二について」(「明治学院論叢」291号、80・3)は、「日本軍の残虐行為と絶大な権力を抜きにしては、この小説の主人公たちの行動は理解できない」と指摘している。

(17) シンガポールの人口の七〇%以上を占めていたが過酷な弾圧に苦しんだ華僑に比べると、日本の占領初期においてマレー人は比較的優遇されたと言える。日本軍はマレー人を利用して「敵性」である華僑を抑え込もうとしたからである。シンガポールにおける「こうしたエスニック・グループ別の異なったあつかいが、エスニック・グループ間の対立を深め、戦後の国民統合を難しくした」といわれている。(田中恭子『国家と移民』名古屋大学出版会、02・6)ことから考えれば、骨董屋の主人やベン・リヨンがマレー人に対して侮蔑的な発言を時折する背景にもそのような事情が関わっていると思われる。しかしだからこそ、後述するように民族間の壁を超える試みを彼らが行おうと考えていたことが注目されるだろう。

(18) かつて孫中山(孫文)とともにハノイやシンガポールにおいて中国同盟会の勢力拡充に尽力し、その後、心ならずも日本の傀儡政権の長となった汪兆銘に対して、シンガポールの華僑たちが抱いた思いは単純なものではなかったと思われる。(小林英夫『日中戦争と汪兆銘』吉川弘文館、03・7などを参照)。もちろん華僑社会もまた一枚岩ではない。出身地や方言によって細かく分かれ、貧しい移民

と英国風の生活を送る富裕層との違いも大きかった(田村慶子『シンガポールの国家建設』明石書店、03・3などを参照)。(英国風)の名前を持ち、(多分にラッフルズ大学生の気風を存してゐる)とも評されるベン・リヨンは、(少なくとも日本が占領するまでは)比較的裕福な階層に属していたと思われる。ベンやその家族が意識していたのは日本人の視線だけではなかっただろう。

(19) 拙稿『井伏鱒二』の流れに注ぎ込むもの——シネマ・意識の流れ——農民文学』(国文学研究)161集、10・6)などを参照。

(20) たとえば寺田透『井伏鱒二論』(『批評』48・3)は、「中年の中国婦人のたよりない愛情の動揺を描き出した作者の手つきは恐ろしく清潔である」と称賛している。

(21) 野寄前掲論文は「後日、アチャンが軍曹との連絡を望むのは、大厄を防ぐために小厄を甘んじようとする寡婦の捨て身の覚悟ともとれる」と述べている。

(22) 小熊英二『日本人』の境界(新曜社、98・7)などを参照。

※ 本文の引用は、初刊本を底本とする『井伏鱒二全集』(筑摩書房、96～00)及び旧全集に拠る。

新刊紹介

藤尾健剛著

『漱石の近代日本』

本書は、「漱石が近代の日本をいかに認識し、表現したか」を朱子学、社会学が漱石に影響を与えていたことに言及しながら読み解いていく。

「草枕」の美学＝倫理学、「虞美人草」——近代と朱子学」は漱石と朱子学の交わり観点から論じたものの代表であろう。これまでの漱石論で言及されてきた、仏教思想と老荘思想に加えて、朱子学からの影響を指摘した論として、興味深い。

また、社会学の観点からの論としては、「ルトウルノー『結婚と家族の進化』の波紋」が挙げられる。ルトウルノー受容に

よって、漱石は、男性が家父長制によって育まれた女性観を克服できるかに、近代化進展のメルク・マールを見ていたようだという論は後期の漱石を考える上で大きな視座を提示したものだといえよう。

(二〇一一年二月 勉誠出版 A5判 四〇三頁 税込六八二五円) [倉持奈美]